

和 わ 和

第2号

発行・編集 奈良県障害者スポーツ指導者協議会
 〒636-0344 奈良県磯城郡田原本町宮森34-4 奈良県心身障害者福祉センター内
 TEL0744-33-3393 FAX0744-33-1199
 ホームページ <http://narakyougikai.holy.jp/>
 メールアドレス narakyougikai@fm.holy.jp

奈良県障害者スポーツ指導者協議会

会長 柏田 勝幸

会報「和わ和」を創刊して早くも一年が経過しました。創刊号で

全国障害者スポーツ大会前の十月、県障害者スポーツ大会前の三月ごろに、競技の運営、審判、指導ができるよう実施したいと思っております。まため役を副会長の近藤脩氏にお願いしました。

目標を設定して

研修・スポーツの普及・情報の共有

技術、知識、意欲を磨こう

私は皆様に「初心にかえって活動を」と呼びかけました。この一年を振り返りますと、障害者スポーツ大会、種目別行事、選手団の強化練習のサポートや、研修会に参加する人が増え、特に嬉しかったことは、昨年度も新たに七人のメンバーが加わったことでした。着

さらに確実なものにするために、目標を設定し、技術、知識、意欲を磨いていきたい、と考えています。事業として一つ目は研修会の実施。二つ目はスポーツの普及。三つ目は会員相互の情報の共有を挙げたいと思います。

スポーツの普及は、出前教室をメインにして地域での普及を図りたい。そのために地域ごとに、協議会の会員同士が連絡を取り合い、地域で進められたら、と考えています。まため役を理事長の島岡眞氏にお願いしました。情報の共有は広報紙の発行のほか、研修会

大会、教室等への積極参加を皆様に呼びかけます。ぜひ多くの方と顔見知りになつてくたさい。

これからは、障害のある人たちと一緒に楽しみながら本物の指導ができる指導者になつていただきたい、と思います。中級、上級、コーチと一段上の資格への挑戦も可能です。皆様の一層のご精進を期待しています。



写真は「車椅子スラローム 技術研修会」

サポートの現場から 体験者の声を聞いた

陸上 射場 誠

選手の能力を 最大限に 結果を出すサポートこそ

障害者スポーツ指導員協議会が奈良に結成されて4年。250人を超える方が会員登録されていますが、ほとんどの方はどのような活動をすればいいのかわからず、試行錯誤されているのが実情のようです。それが貴重な皆様のパワーを眠らせている大きな原因になっています。そこで今回は、現場でサポートを続けておられる方々の豊富な経験を紹介し、その中から、私たち指導員はいま何をすべきか、何が必要か、今後の展開方法等の提言を特集しました。ぜひ活動の参考にさせていただき、皆様のご意見もお寄せください。

私が「障害者スポーツ指導員」の資格を取得して、障害者スポーツ（特に陸上競技）に携わり、今年で五年になります。簡単にスポーツといっても、いつでも、誰でも、どこでも出きる生涯スポーツと、勝ち負けを競う競技スポーツに分類されますが、いずれにしてもスポーツを楽しむこと、素

晴らしいことです。私は、学生のころから「競技スポーツ」を続けてきましたが、「障害者スポーツ」を知り、関わり、携わることで、レクリエーションや、軽スポーツを楽しんでいる方の「笑顔」や「楽しそうな雰囲気」にまで接することができ、見ていくとこちらまで楽しく、充実した気持ちになります。スポーツというのは「誰でも楽しめる、笑顔を生む」ものだと思えて実感することができました。様々な目的で運動されている障害者の方を知っているスポーツを知ってもらい、楽しみ経験していただく場を作り、広めていく活動をするのも私たち「障害者スポーツ指導員」の重要な役割の一つなのです。しかしながら、私



は指導員には他にもやるべき役割があると考えています。資格取得当初、私は「障害者スポーツ指導員」という資格そのものが「競技スポーツ」の指導に重点を置くものだ、と考えていました。このため初めて携わった「国体強化練習」の雰囲気「生涯スポーツ」という感じで、とても「国体強化練習」という雰囲気ではなく、戸惑いを感じました。このような練習内容や雰囲気、国体に行つて選手たちが結果を出せるのか？と矛盾を感じました。そんな時、過去に恩師に言われた「競技力」「体力」「普通の子が普通のことをして勝てるわけがない」という言葉を思い出しました。

「知的障害者」「身体的障害者」、そして「健常者」に関わらず、「身体的限界」と「精神的限界」があります。その限界に対して指導者側が「障害者だから」という見方で選手の限界を決めてはいけません。私たちは、選手の能力を最大限に発揮させること、目標を明確にし、その目標に対して選手に動機付けをしなから結果を出させるようサポートすることも「障害者スポーツ指導員」の役目だと思っています。奈良県には数名です。

バスケット ボール 私たちの 資質向上

仲 奈生美

二〇〇五年十一月五日、七日、第五回全国障害者スポーツ大会「輝いておかやま大会」にバスケットボール選手の手をサポートとして参加させていただきました。初めての参加で、とまどう面もありましたが、選手たちのプレーする姿を眼にし、またいろいろ話を聞いて

が、各種目で世界へ羽ばたこうとしている選手たちがいます。しかしながら、選手が継続してスポーツを続けられるような環境（指導者・場所・金銭的な問題も含め）に恵まれていないのも現状です。今後、そのような選手に対してしっかりとバツクアップしていけるような体制を確立することも私たちの課題だと思っています。

「障害のある人がスポーツを通して最高のパフォーマンスをし、最高の笑顔になれるよう、スポーツ指導員としてこれからも努力していきたい」と思っています。

選手たちが最高のプレーができるように、私たち指導員も、大会等のサポートだけでなく、日常の活動においても、指導、アドバイスができるよう資質の向上が必要であると思っています。



実際に試合を観て、競技レベルは、指導者の有無等、練習環境の違いにより大きく左右されているように思いました。

水泳 山口 武志

「水の魅力」伝えたい 多くの笑顔のために

私が障害を持った方と水泳を通して、初めて関わったのは大学二年生のときでした。当時、所属していた手話サークルに「水泳教室の手話通訳」の依頼が来ました。もともと水泳が好きだったこともあり、喜び勇んで出かけるようになりまして。プールでは、コーチの伝えることを一言一句通訳していたかというところではなく、一緒にプールで泳いでいることのほうがはるかに多かったのです。コーチと生徒さんの間では、

動作やデモンストレーション、表情や身振りで教室が成り立っていたからです。ですから私の仕事は、むしろ休憩中や開始前、終了後の会話を一緒にすることでした。

そんな会話をすることで、生き生きとされている生徒さんとコーチの關係に憧れを抱き、いつかこんな仕事になりたいと思うようになりました。

水泳のボランティア活動を始めてから十五年目になります。その間に出会った方の数たるやどれくらいになるでしょうか。その活動を通じて一番感じることは、「水の魅力」に時間の差はあれ、どの方も好きになっていかれるということ。『水の魅力』に求めるものは様々です。ある方は水の「きらめき」に、「水中の静けさ」に「浮遊感」に、「陸上では感じない前庭・固有感覚などの体勢感覚」に魅力を感じているようです。面白いのは、

もともと子供を楽しませるために連れて来られている保護者の方も、いつしか自分から楽しむようになっていけること。しかし一方では、思うようにならず途中でやめていかれる方や、都合で足が遠のく方もたくさんいます。

『水の魅力』を十分伝えきれなかった反省を感じます。

健康産業全盛のこの時代にあつて、プールに求められているニーズも多様化しています。障害のあるなしに関わらず、「競技」「健康」「リハビリ」「コミュニケーション」など、使い方に合わせたプール運営が営まれるようになってくれたらいいなと思います。

これからも一人でも多くの笑顔のために『水の魅力』を伝えていきたいと思えます。



私は障害のある人たちと初めて出会ったのは、まだ日が浅く三年ほど前で、ある知的障

フライング ディスク 津川 昌二

大切な指導者の熱意 目線に合った指導も

害者の事業所で体操の日の二時間を受け持ったのが始まりです。

障害の程度も軽いとはいえず、いろいろな軽スポーツを試みましたがうまくいかず、その中でやや喜んでいただいたのがフライングディスクでした。とはいえ指導員をはじめ、作業所の皆さんは、初めてのことでうまく投げられず、まず

指導員から指導、約一時間余りでやっとなんとか水平に飛ばすようになりまして。このあと練習に入ったのですが、すぐ予定の時間になってしまひ次回へ。

二回目は、ダンボールに穴を空け、中に空き缶をぶら下げたディスクゴルフのゴールを作って持参したところ、興味を持った皆さんが一生懸命になり、練習

指導員では、やる気のあたる皆さんがかわいそうでならない、と感じました。

一方のある施設ではこんな経験もしました。この指導員さんとは昨年末の障害者スポーツ中級指導員養成講座と一緒に受講。フライングディスクの指導依頼を受けましたので、今年春に出前講座を行いました。

施設の二十人余りの皆さんに、アキュラシーに挑戦してもらったのですが、大半の方が上手に投げられるので驚きました。そこでもう一度、基本を確認のため教えると、一層ディ



スクがぶれずに飛ばすようになり、二度びっくりしました。

いろいろお話を聞きますと、初めに基本を教えてくれる窓口を

探したが見つからなかったもので、自分で勉強しながら教えてきたとのこと。「我流では、その時々で飛ぶところが違い悩んでいました。今回基本を覚えていたのだいので、これからつけて指導をしていきたい」と大変喜んでくれました。

後日、電話をいただただき、その後、事あるごとくにディスクをとり出して投げている、とのこと、本当にうれしいことです。

わずかに二つの事例ですが、指導者の熱意がいかに大切かを痛感しました。障害の程度は一人一人違います。その人の目線で指導していくことの大切さも伝えてくれました。

私たちは、出前講座の開催等、これから多くの皆さんに接する機会をもっともつと増やしていきたい、と考えています。

十一月三日(祝)には奈良県障害者フライングディスク協会創立一周年記念大会を開催する予定です。皆さん、こそぞってご参加くださいます。

